

昭和の大横綱 第四十八代横綱



〈写真・横綱大鵬オフィシャルサイトより〉

巨人・大鵬・卵 焼き…伝説

大相撲の優勝回数で白鵬(現・宮城野親方)に抜かれるまで最多の32回を誇り、昭和史を彩った大横綱・大鵬が東京・新宿区の慶応病院で心室頻拍のため死去したのは、11年前の2013年1月19日午後3時15分だった。「人生百年時代」の昨今からすれば72歳の旅立ちは、早過ぎた。初場所中で大相撲の中継をしていたNHKは速報で流し、夜のニュース番組はどこもトップニュースで報じた。翌朝の新聞各紙も「巨人、大鵬、卵焼き」の言葉を紹介しながら大相撲界への功績とその数奇な運命をたど



▲「大鵬道場」と掲げられた大嶽部屋には一般の弔問客が…

筆者が大鵬の遺体が安置された東京・江東区清澄の大嶽部屋を弔問に訪れたのはその4日後のことだ。土俵の半分が板の間になり、稽古場の奥の上がり座敷には、大鵬の化粧まわし姿の額が置か

大鵬 知られざる軌跡

〈第1回〉旅立った伝説の鵬

●ジャーナリスト 黒田伸
(文中写真も筆者)

れ、その前に死化粧を施した大鵬が静かに眠っていた。場所中ということもあって、稽古はすでに再開され、四股を踏む程度だったが、数人の弟子たちが大相撲界に輝く歴史を残した親方の眠る稽古場で、汗を流していた。

日本相撲協会から一代年寄と

して贈られた「大鵬部屋」は、大鵬親方の定年とともに大嶽部屋となり、大鵬の名前は「大鵬道場」という形で玄関に掲げられている。

その前に記帳台が置かれ、芳子夫人の筆文字で「ファンの皆様 有りがとうございました」の紙が張ってあった。

部屋の中からは、時おり若い衆が出てきて弔問客にあいさつをする。記帳の紙は1時間で数十枚が重ねられていった。

早朝から全国各地から弔問客が手を合わせにやって来た。北海道からの関係者もいた。

「長嶋、王と並んで昭和のヒーローでした。苦勞さまでした」と話す60歳代の男性。近所の50歳代の女性は「いつも気さくにあいさつしてくれました。偉大な方が近所に住んでいて、誇らしく思っていました」と語った。

語り継がれる 柏戸との大一番

葬儀・告別式は千秋楽後の1月31日に東京・青山葬儀所で営まれ、約1500人が参列した。葬儀委員長は当時の北の湖理事(長・元横綱北の湖)が務め、黒柳徹子と横綱白鵬が弔辞を読んだ。

大鵬を「角界の父」と呼んでいた白鵬は、自分のしこ名が大鵬に由来していることに触れて「悲しくて仕方ありません。厳しい言葉を(もつと)直接いただきましたかった」と悼んだ。

亡くなる2日前に見舞いに訪れたことを明かし「最後にお会いしたときの『しっかりやれよ』という言葉が胸に、精進していきます」と参列者を前にして誓った。

式の最後には、芳子夫人があいさつした。

「引退してから36年間は、病気の闘いでした。リハビリをしている時も、強い姿を見せてくれました。最後まで横綱として、立派に闘い抜きました。お父さん、お疲れさまでした。ありがとうございます。天国から、力士や孫たちにも時々気合を入れてあげてくださいね」

青山葬儀所を後にする時には、思い出の一番が4年ぶりによみがえった。30回目の優勝を果たした1969年夏場所千秋楽の柏戸戦との実況が流された。

「30回の優勝はだれも超えることはできないだろう」と言われていた絶頂期の相撲の録音だ。テレビに釘付けになっていたあのころの相撲がよみがえる。呼び出し吾郎が拍子木を打ち、霊きゅう車がクラクションを鳴らすと、あちこちからすすり泣



▲白鵬も弔問に訪れた



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<https://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)